夢中な「Student」を応援する！
夢中dent
プロジェクト

夢中dent Stories

vol.1
2022

人々の夢中を応援するクラシエが出会った、夢中 dent たち。
時に挫折し、時に苦悩し、それでも夢中になってつき進む彼らの物語を冊子にしました。

夢中な「Student」を応援する！

夢中dent プロジェクト

何かに夢中な若者「夢中dent」。

彼らの夢中に対する想いや

夢中の魅力を取材し、冊子にしました。

なかなか夢中になれない時、

夢中な気持ちを忘れてしまった時、

もう一度、夢中になってみたい時。

読んでみて欲しい「夢中dent Stories」です。

夢中dent Stories vol.1 2022

P.03 **田中里奈**

カメラを通じて、いろんな人に会って、いろんな笑顔を撮りたい。

P.07 **髙木七実**

勝つことは大事。楽しむことは、もっと大事。

P.11 **大村優智夏**

わからないことがわかった分だけ、夢に近づいていく。

P.15 編集後記／企業情報

カメラを通じて、いろんな人に会って、いろんな笑顔を撮りたい。

田中里奈さん

たなか　りな

最初のきっかけは、おじいちゃん。

カメラの原体験は小学生時代にあったそうです。「学校行事の時におじいちゃんが良い場所に陣取って、私の写真を撮ってくれたことをすごく覚えています。おじいちゃんは警察官で背も高くて、そんな体の大きな人が三脚の上に乗ってこっちを撮っていたので目立っていました。あー、私を撮るためにきっと朝早くから場所取りしてくれたんだろうなって。愛情を感じてとても記憶に残っています」。

「初めて自分のカメラを持ったのは中学生の時。両親にダメ元でカメラをおねだりしたら、誕生日とクリスマスとお年玉をあわせたプレゼントとしてならということで、デジタル一眼レフカメラを買ってもらいました。お父さんはそんなに写真にはまらないだろうと思っていたようですが、そこから一気に夢中に。勉強や部活動で忙しかったけれど、少しでも時間があれば風景を中心にあらゆるものを撮っていました。けれど、そのカメラは2年くらいで壊れてしまったんです。あまりに写真が楽しくて、ついつい撮りすぎてしまい…」。

大学では映像芸術を専攻。実際に映画撮影も行ない、自主映画作品も完成させたそうです。この頃は自信にあふれていたと田中さん。「中学、高校時代もずっとカメラを触っていたので、他の人よりもリードした状態で大学に入りました。だから、学校の課題で撮影技師の募集があればすぐ立候補。ただ、映像をやっていると、一瞬を捉える写真のほうが向いているなと感じるようになりました」。

突然、失ったカメラへの自信。

将来の夢も徐々に固まり、順調に大学生活を送っていた大学3年生の春。カメラの夢を揺るがす事態に見舞われます。「その時期に入っていたゼミはとても人気のあるところで、選抜された少数の学生だけが集まっている環境でした。そのゼミに入れたことで、いつも頑張り過ぎてしまい…。体調を崩

しやすくなっていました。そんなある日の撮影中、長時間の撮影と体調不良、周りからのプレッシャーも重なって、突然、自信を失ってしまったんです」。

そこから、カメラも触れなくなってしまい、外に出ることも難しくなったそう。ご両親に支えられながら病院へ行くと、適応障害という診断が。「病気になったことよりも、カメラに触れなくなったことにショックを受けていました。自他ともに認めるカメラバカでしたから。そんな私がカメラを触れなくなるなんて、まさかという日々でした」。

「その時期に、たまたま配信アプリを始めて、SNS上で友達が何人かできたんです。落ち込んでいてもポジティブに励ましてくれる彼らと交流するうちに、外には出れるようになりました。まだ、カメラは無理でしたけど」。

何かきっかけさえあれば、カメラを触れるようになるかもしれないと思っていた田中さん。そんな時に、たまたまSNSで見つけたある募集に目を奪われました。

夢中dentを機に、もう一度カメラを。

「この【夢中dentプロジェクト】への応募をきっかけに、また写真を撮れるようになりました。もし選ばれた時に、まだカメラへの抵抗感があったらいけないと思って。応募直後に思い切ってカメラを取り出してみたんです。そしたら、拒否感もなく再び撮れるようになっていました。久しぶりにカメラを手に取り、友達を撮ってみると120枚撮って3枚くらいしか納得のいくものがなく…。撮れた嬉しさと共に悔しさを感じました」。

そんなタイミングで夢中dentの採用通知メールを受け取り、ビックリしたと田中さん。「うそでしょと思いましたが、選ばれたからにはやるしかない。カメラは復活したばっかりだし、進路も決まっていないけど、プロカメラマンになりますと宣言しちゃおうと思いました。この夢中dentプロジェクトをきっかけに、あらためて夢への覚悟が固まった感じ。両親にも、カメラの夢を追いたいということをちゃんと伝えました」。

仲間たちに夢中dentに選ばれたことやカメラ撮影を再開したことを伝えると、想像以上の反響があったそう。「もう一回、カメラに夢中になりはじめたら、たくさんの人が励ましてくれた。私が思っている以上に、私の夢を応援してくれる人がいたんです」。

もともと、道端で写真を撮っている家族やカップルのカメラマン役を買って出ることが好きだった田中さん。いまはその時の「良い写真を残してあげたい」という最初のモチベーションが蘇ってきている。

「写真はいまこの瞬間しか撮れないもの。そのベストの写真を撮ってあげたい。撮る係になってしまったお父さんやお母さんが写っていない写真を残すのはかわいそう。修学旅行生7人に声をかけて、7人それぞれがポーズを決めた集合写真を撮ってあげたらすごく喜ばれたこともありました。そうやって、カメラを通じていろんな人のいろんな笑顔を撮ってあげたい。そんな気持ちが再熱してきました」。

撮影者もモデルも楽しい撮影空間で。

そうして、カメラを通じて関係が生まれた人や、つながりが強まった人たちの存在も田中さんの夢を

大きく後押ししています。

「初めは撮影モデルとして出会って、いまでは親友のようになっている人や、SNS上で応援してくれる人、ストロボやカメラ用リュックなどをプレゼントしてくれた人、いつでも見守っていてくれる両親など。そういう人たちの力も貰っているので、どんな形でもカメラの仕事に携わりたいです。あとはいま使っているカメラは父に買ってもらった大切なものなんですが、就職したら自分のお金でカメラを買ってみたい。自分のお給料でカメラを買ったら、もっと長く使いたい、活躍したいという気持ちが強くなると思うんです。そういう新しい夢も生まれています」。

そんな田中さんのモットーを聞くと、「撮影する人も撮影される人も、どちらも楽しんでいることを大切にしています。そういう空間でこそ、その人の素が出た良い笑顔が撮れるんです」とのこと。誰もが楽しんでいる撮影空間で、これからもステキな写真が生まれていきます。

カメラを好きでいられることも才能。

「あらためて振り返ると、一眼レフを買ってから、中学・高校の学校行事での撮影やポートレート撮影を依頼されることが増えて、内気だった性格も変わりました。知らない人でも話しかけてカメラマン役を代わったり、撮影を盛り上げるためにおどけてみたり、自発的に行動できるようになったんです。私自身を変えてくれたカメラは、切っても切れないものでした」。

すでにカメラは趣味の域を超えて、人生に関わる生きがいになっていたのかもしれません。2022年の秋には大学を卒業し、夢への新しい道のりが始まります。「現時点では、卒業後はアルバイトをしながら夢を追うつもり。SNS を通じて撮影依頼が来るので、そこで経験値を積みながらチャンスをうかがいます」。

一時はカメラに触れなくなり、カメラマンになるという道が危ぶまれた田中さん。今後も、挫折するようなことがあるかもしれません。けれど、カメラを好きでい続けることは忘れずに、カメラへの夢中、カメラへの好きを追求したいと話します。

「自分自身、いろいろあったことで、頑張っている人に出会いたい、そんな人たちの笑顔を撮りたいという目標ができました。まさに、この夢中dent みたいな企画は理想的ですね。頑張る人を応援する、そんな仕事がしたいです。そのために、カメラが好きという原動力は大事にしようと。これまで楽しいからというだけで、何百万枚も写真を撮ってきました。友達と動物園に行って、動物を撮るのに没頭してしまい、気づいたら 8 時間くらい撮影していたことも。友達は怒って帰ってしまいましたが（笑）。そういう、夢中になれることも才能だなと思うんです。だから、好きを大事にしていきたい」。

田中 里奈
小学生の時の行事に祖父が三脚とカメラを持って駆けつけ撮影してくれたことが、カメラを意識し始めたきっかけ。中学生になった頃からマイカメラを手に、撮影を始める。大学では映画製作やバンドマン･芸人の撮影も手掛ける。

何度かプロの現場でアシスタントも経験。

気付けば被写体と仲良くなっている田中さん。

応援してくれる人からもらった愛用カメラ。

田中里奈作品集

Rina Tanaka's portfolio

撮影の依頼はSNSで受け付けています!

勝つことは大事。楽しむことは、もっと大事。

髙木七実さん

たかぎ　ななみ

勝利を追求した部活時代。

中学校から大学まで、競技は違えど強豪チームでスポーツを続けてきた髙木さん。そのスポーツ観は勝利がすべてという所から始まったと言います。「中学校では県大会に出るような強いバスケ部で、常に勝利を追求していました。楽しい部分はあったけれど、きつい面もあって…。もうスポーツはいいかなという気持ちになってしまい、高校では運動部はやめようと思っていました。けれど、ハンドボール部の先輩が毎日お昼休みにやってきて、熱心に誘ってくれるので体験してみることに。未経験のスポーツということもあり、すべてが新鮮で楽しくて、気づいたらはまっていましたね」。

大学進学後もハンドボール部に入った髙木さん。そこは全国でも屈指の強豪チームで、本気で日本一を目指す環境だったそうです。「24時間365日、ハンドボールのことだけを考える。そんなチームでした。選手もスタッフも、すべての人が全力でハンドボールに向き合い、互いにリスペクトしながら切磋琢磨して頂点を狙う。その一員であることが誇らしかったし、同時に責任も感じていました。だから、就職活動が始まり、選手として100%を注げない状況で現役を続けるべきか悩みましたね」。

また、説明会や面接を受ける中で、自分がどう働くべきか、何をしたいかもわからなくなったそう。そんな時に、お父さんからの言葉が転機になった。「悩みを相談したら、自分の仕事を手伝ってみないかと提案されたんです」。

その場で決めた、新しい進路。

髙木さんのお父さんが手掛けるのは、船舶の個人売買サービス。ちょうどその事業を委託する形で、知り合いに任せようとしているタイミングだった。「良い人だから、とりあえず会ってみたらと言われ、すぐに話をすることになりました。会ってみると、仕事への情熱にあふれる魅力的な人で、やろう

としている事業も面白いなと。その場で一緒に働いてみたいですと伝え、大学3年生の冬から大学と並行しながら働くことに」。

大学ハンドボール部は3年生の日本選手権を最後に引退。「本当にステキなチームだったので悩みました。しかし、仕事とチームの両立は時間的に不可能だと思えたことに加えて、どちらも中途半端になるのが嫌でした」。大学3年生の時点でほとんど単位も取れていたという髙木さん。そこからしばらくは会社中心の生活が続きました。

「仕事は出社日も決まっていないような自由な職場で、週1回のミーティングで状況確認を行なうだけ。あとはそれぞれの裁量で動けるので、すぐにやりがいも感じられました。ただ、仕事に慣れてきたタイミングでやっぱりハンドボールやりたいなという気持ちが再熱して…。知り合いにビーチハンドボールチームのThetis東京を紹介してもらいました」。

夢中はいくつも
あって良い。

そこで髙木さんが出会ったのは、新しいスポーツ観でした。「ビーチハンドボールはハンドボールとは別物でしたね。人数が違うし、ジャンプしての回転シュートは点が増えるといったことや戦略・戦術も全然違う。何より、みんながプレー中も笑顔で楽しんでいる姿が衝撃的でした」。

経験者が少ないビーチハンドボール。ほとんどの人が初心者からのスタートとなるため、Thetis東京はビーチハンドボールを楽しむことを大切にするチームでした。「これまで、試合中に歯を見せることはほとんどなかった。それが、Thetis東京では笑い声が飛び交っていたんです。かっこいいプレー、楽しむプレーをすることが得点アップにもつながるので、そんな魅せるプレーがたくさん出る。それを見て私も自然と笑顔になっていました」。

また、競技だけに100%集中ではない環境にも新鮮さを感じたと髙木さん。「特に日本では、無理してでも1つのことをやり抜く人が素晴らしいとされています。でも、Thetis東京の人たちには、会社や大学にも行きながら、チームに来てくれるだけですごい！来れる時に来てくれればOK！と言われたんです。監督は日本代表を経験している方だし、決して弱いチームではない。仕事や生活を尊重しながらも、真剣に活動しているチームというのが新鮮で、打ち込むことを1つに絞る必要はないと気づきました。夢中はいくつあっても良いんだって」。

楽しみながら、
勝つために。

初めてビーチハンドボールの公式戦に出たのは全日本ビーチハンドボール選手権大会でのこと。全国からチームが集う大会で、対戦相手は東京の強豪チーム。そのデビュー戦で髙木さんは初ゴールを決め、チームも見事勝利をおさめました。「もちろん勝ったこともゴールも良かったんですが、試合後の相手チームとの交流が何より嬉しかったです。ビーチハンドボールのチームは全国でも数が限られます。だから情報交換をする機会は貴重。相手チームとはお互いに練習方法を教え合って、相手選手からは後日、練習風景をおさめた動画も送られてきました。試合では敵味方にわかれますが、ビーチハンドボールを広めたい、お互いにうまくなりたいという仲間意識を感じましたね」。

かつては楽しさよりも勝利を追い求める環境にいた髙木さん。いまはビーチハンドボールを通じて、スポーツを楽しむという価値観を広げていくことに注力しています。「魅せるプレーで自分もチームメイトも喜べるビーチハンドボールという競技が広がれば、自然とスポーツをもっと楽しむ文化も広まるはず。最近では、渋谷で体験会のサポートをしたり、男女混合のイベント試合に参加したり、この輪が広がるようにチームで活動しています。チームのSNSを見て興味を持ち、気軽に参加してくれる方も増えてきました」。

勝つことと楽しむことという、一見相反すると思われる2つを同時に追い求めることが理想。「苦しみながら勝つ、楽しむけど勝てない、そのどちらでもない。全力で楽しみながら勝つために頑張る。そんな道を進んでいきたいです。もしかすると、それが最もスポーツを楽しめる方法かもしれません」。

これからも、
たくさんの夢中を。

大学を卒業し、本格的に社会人として動き出す髙木さん。これから環境が変わっていく中で、夢中はいくつあっても良いという価値観も大事にしたいと話します。「これまで学業、仕事、スポーツと3つの夢中を追いかけてきました。複数のことに夢中になるには、自分自身の意識を変えることに加えて、周りの理解も不可欠だと感じます。夢中の対象を、無理に1つにしなくてもいいし、1つのことだけに100%を注がなくてもいい。周りにその理解と協力のある環境が、もっと広がってほしいです」。

仕事では船の個人売買事業の責任者になり、さらにやりがいが出てきたそう。自分のアイデアがベテランの方から評価されることもあり、働いていて嬉しい場面も増えていると話します。「ビーチハンドボールに夢中、仕事にも夢中。それがいまの私です。複数のことに夢中になるのは、決して中途半端なことではないんだと気づきました。それぞれの道をそれぞれ全力で取り組む。そんなスタイルで、これからも夢中でいたいですね」。

ビーチハンドボール、仕事、そして新たな夢中との出会いもあるかもしれません。髙木さんの前には、いくつもの夢中が広がっています。

髙木 七実
中学生時代はバスケットボール部に所属。高校進学を機にハンドボール部へ転向する。そこでハンドボールの魅力に気づき大学でも競技を続けるが、就職活動をきっかけに現在のビーチハンドボールチーム「Thetis東京」へ。

シュートブロックも全力!

たくさんの夢中を語る髙木さんは輝いていました。

撮影の合間も笑い声が絶えないThetis東京。

空中でパスを受けてそのまま放つ「スカイシュート」。

準備体操中もにぎやか。

わからないことが わかった分だけ、 夢に近づいていく。

大村 優智夏さん

おおむら　ゆちか

中学校卒業と同時に、自立して生きていく。

この春から、専門学校へ進学することが決まった大村さん。エンジニアになって、人の役に立ちたいという夢に向かって大きく前進していきます。しかし、ここまでの道のりは平坦なものではありませんでした。

「中学校3年生の時に、家庭の事情で高校へ進めなくなりました。すでに行きたい高校から合格を貰っていた時期。高校で学びたいことや、やりたいことも思い描いていたので、ショックは大きかったです。さらにその時期から一人暮らしを始め、社会人として働いていくことになりました」。

学校の先生の紹介もあり、地元の飲食店で働けることに。そこから3年間は生きていくのに必死だったと大村さん。「16歳の時に、高校で勉強したいという話を知人にしたら、行きたいなら行けばいいと軽く言われて…。それが悔しくて色々調べて、高卒認定や奨学金のことを知りました。こういった制度を使えば、高校に通えるかもしれないと思い、まずは3年間、働いてお金を貯めることに。その3年は本当に自分だけが頼りで、自分がしっかりしないと生きていけないという不安がありました」。

19歳になった大村さんは計画通り、高卒認定試験に向けて動き出します。まずは参考書を揃えるところから。大量の参考書を前に、嬉しさを感じていたそうです。「高校を目指せるということと、昔から本を読むのが好きで、本を読んで何かがわかる感覚が好きだったんです。知的好奇心があるタイプというか。さらに国語や英語の参考書は結構わかる内容ばかりで、いけるかもしれないと思いました」。

勉強は欲しいものが手に入る感覚。

逆に、壁になるかもしれないと感じたのが数学。「正直、昔は数学なんてわからなくても生きていけると思って避けてきたんです。でも、試験の必修科目なので逃げられない。本当に初歩の初歩、計算ド

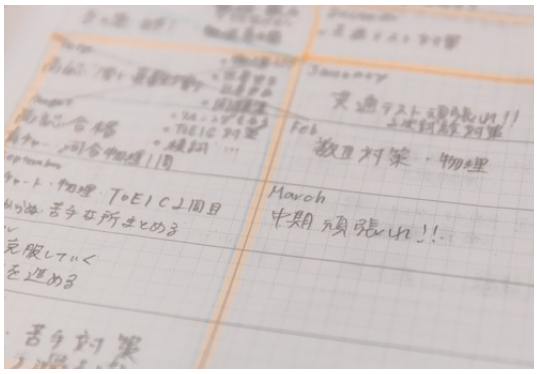
リルの足し算・引き算というレベルからやり直してみました。すると、ちょっとだけ面白くて。コンピューターや化学はもともと好きだし、理系を目指しても良いかもしれないと感じました」。

そこから高卒認定試験に向けてのプランを練り直す大村さん。1年後にすべての科目で合格点を目指すのは現実的ではないと考え、2回にわけて試験に挑むことにしました。「数学、物理、化学は基礎から学び直して時間がかかりましたね。最初は数学の問題を見るのも怖いくらい苦手意識があったので、そこで歯を食いしばって少しずつ理解していきました」。

苦手科目であっても粘って勉強しているうちに、新しい感覚が掴めてきた大村さん。その感覚が受験勉強を大きく後押ししていきます。「ゲームで強い武器、欲しかったものが手に入る感覚です。それまでわからなくて苦しくて、モヤモヤしていたものが一気に解消されて、欲しかった知識が吸収される感覚。うわー嬉しいー!って感じです。思えば、学校の課題のためとか、試験のためという勉強は好きではありませんでした。けれど、この知識を得たらエンジニアの夢に生かせるなとイメージできたら、頑張れるようになったんです」。

夢のためにモチベーションを保ち続ける方法を見つけた大村さん。そのままの勢いで2回の高卒認定試験へ。冬に国語と数学、英語。翌年の夏に物理、世界史、日本史を受け、見事合格を掴み取りました。

「ほっとしましたね。1回目の試験で受けた国語や英語は自信があったので、いけるだろうと思っていました。問題は数学と物理。ずっと不安でしたが、ちゃんと点数を取れていて自信になりました」。



原動力になった、
具体化された夢。

「こうなったら次は大学だと考えて、仕事も辞めて毎日8時間以上は机に向かうことにしました」。しかし、勉強の難易度が上がったことや模試の結果に落ち込むことも多かったそうです。

「わかんない!無理!E判定!無理だ!と泣いてばかりの日もありました。独学だと超えられない壁もいくつかあって。そんな時に、ネットに上がっていた勉強動画は本当にありがたかったです。また、SNS上でわからないことを聞くと丁寧に教えてくれるエンジニアの方がたくさんいて。面接対策も兼ねてエンジニアの仕事について深掘りしていくと、夢の形が具体的になってやる気が出ました。例えば、都市開発に携わるインフラエンジニアの仕事。ここ長野県でIT化を必要としている街を見てきて、自分がやりたいことと生活がリンクしました。本当に役に立つ仕事ってそういうものなんだろうなって」。具体的な夢が、苦しい時の原動力になりました。

大切にしたい、
幼い時の夢中。

エンジニアを目指すきっかけになった昔の思い出も、勉強のモチベーションになったと大村さんは話します。「なんでエンジニアとかパソコンとかに興味を持ったのか思い返すと、1つはおばあちゃんがパソコンを持っていたことが大きかったなと。それを使わせてもらって始めたブログがとても楽しかった。文章を書いて載せることもそうなのですが、ブログのデザインや構成をいじっていくうちに、プログラミングにも興味が湧いてきたんです。例えば、プログラミングでマウスカーソルにエフェクトを付けて楽しんでいました」。

2つ目のきっかけとして、地元で開催されていた工業メッセの影響もあるそう。そこで各メーカーが出展する機械製品を眺めたり、ロボット制作を体験してみたり、ものづくりを身近に感じた楽しい記憶が残っている。「小学校でも電子回路を組み立てる授業や、キャタピラの付いたラジコンを作る授業に興味が湧くようになりました。自分のインプットで何かを形にしていくことが好きになったんだと思います。そういう、純粋に夢中になれていた感情も思い出して、勉強の中にも楽しさや夢中な気持ちを忘れずにいこうと」。

勉強はまだまだ
終わらない。

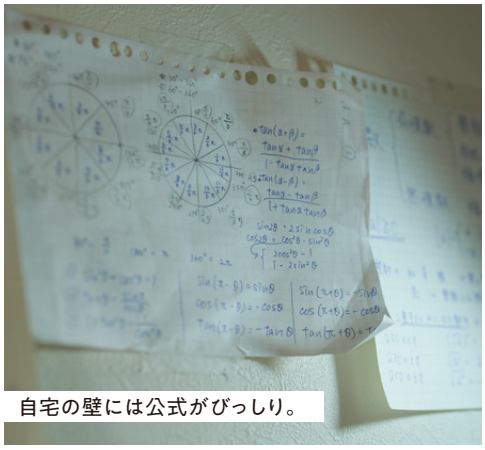
2022年1月、迎えた受験本番。「この時期が一番しんどかったですね。結果次第では何年も頑張ってきたことが報われないかもしれない。そう思うとつらくて」。大学の社会人入試と、専門学校の入学試験を受け、結果は専門学校に合格。長い間の努力は報われました。

「自宅から近くて、情報システムについてしっかり学べる良い学校だと思います。卒業するまでの2年間でエンジニアになるための勉強はもちろん、資格取得にも挑戦していきたい。持っていることで、周りにも安心してもらえるような役立つ資格を。また、働く時のために数学の勉強も続けていきたいです。これからは試験のためではなく、実践のための勉強。大学受験の結果は思い通りにはいきませんでしたが、テストの結果は悪くなかった。どちらかと言えば、テストよりも面接で頭が真っ白になってしまって。それでうまくいきませんでした。でも、これまでにやってきた勉強は無駄にはなりません。これからに生きていきます」。

受験勉強中は息抜きとして読書を楽しんできたという大村さん。これからは読書も夢に直結していきます。「小説、エッセイ、SFなどジャンルを問わずに何でも読むタイプで、受験中は何気ない日常を描いた短編集なんかを何度も繰り返し読んで癒されていました。これからはエンジニアの技術書もどんどん読みたいです。わからないことがわかるようになると、さらに夢に近づいていけますから」。

16歳の頃に思い描いていた進学プランを着々と実践し、エンジニアになるという夢を目前に捉えた大村さん。その着実な足どりで、理想のエンジニアになるために今日もまた歩み続けます。

大村 優智夏
家庭の事情で中学校卒業後、社会人として働き始める。約3年、社会人生活を続けるものの、知的好奇心を抑えられず進学を決意。20歳で高卒認定に合格。そのまま勉強を続け、今年の春からは専門学校への進学が決まった。



自宅の壁には公式がびっしり。

最近は技術書を熟読中。

勉強の合間にストレッチ。

飼っている白文鳥の「ごますけ」が癒し。

編集後記

夢中な若者を応援したいという想いから始まった「夢中dent」プロジェクト。どんな方々に会えるかわくわくする反面、夢中な若者が応募してくれるのか不安もありました。でも、出会えたのは、そんな不安を一掃する想像以上の「夢中dent」たち。

このプロジェクトをきっかけに、再び夢に向かって立ち上がった、カメラに夢中な田中さん。プロジェクト期間中に受験に臨み結果を出した、勉強に夢中な大村さん。そして、夢中の概念を変える気づきを与えてくれた、ビーチハンドボールに夢中な髙木さん。

あらためて、夢中になることの素晴らしさや、夢中のエネルギーの強さを感じました。「いまの若者は冷めている」といった言い方をされることもある世代。しかし、全然そんなことはなく、その熱さに圧倒されっぱなしでした。途中、直接お会いすることが難しい期間もありましたが、約5か月間の取材にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

取材をしながら、私たち自身も夢中な気持ちを思い出せた気がします。「夢中dent」プロジェクトは第2弾も準備中。これからも、どんな夢中に出会えるか楽しみです!

information

夢中になれる明日

Kracie

誰かの夢中な笑顔を見たい。

子どもたちの目がキラキラする。
生き生きとした自分に生まれ変われる
こころもからだも安らいで暮らせる。
誰かを想って、つぎの新しいなにか、を生もう。

クラシエの商品をきっかけに、こころが晴れる。
何かをはじめられる。つづけられる。
暮らしへ、未来へ、たしかな希望がわいてくる。
そんな、夢中になれる明日をつくる。

上記は私たちのスローガンです。クラシエは「人を想いつづける」を企業理念に、シャンプー・ボディソープといった日用品・化粧品事業、漢方薬を中心とした薬品事業、菓子・アイスなどの食品事業を展開しています。

これからも「人を想いつづける」中で、夢中なあなたを応援するために、2022年の冬、第2期「夢中dent」を募集予定です!

※夢中dentとは、何かに夢中な16~25歳の若者のこと。実際に学校に在学しているかは問いません。

夢中になれる明日

Kracie